2007.6.9

イエスとは何か（1）

45(0

〇七・六・九・あごらの集い

イエスとは何か

松下昌義

一、序論

今回の「ミニあごらの集い」の主題は「イエスとは何か」です。お話をさせていただく前に、主題提供者として、「イエスとは何か」に於いて、私が皆さんとご一緒に何を問おとしいるのか、という論点または視点を最初に申し上げ、了解していただいたうえで、後からの語り合いがなされるなら、この度の集いが少しでも意義あるものになるのでいはないかと思います。

そこで、本論に入る前に少し序論的なことを申し上げます。

「キリスト教信仰の中心はイエス・キリストにあり、イエス・キリストに対する信仰こそが、他の宗教からキリスト教を根本的に区別し特徴づけている。」と一般的に言われ、キリスト教会もそれを認めています。だからこそ、当のイエス・キリストとは誰であり、何なのかという問いが、「キリスト教の歴史において根本的な問い」として古来からさまざまなかたちで論議され、現在も続けられているのです。それを「キリスト論論争」と言います。

現在、「新約聖書」の中にある「マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの四福音書」も、「イエスとは何か・誰か」という事に対する一つの答えとして記されたものです。その意味で四福音書はイエスの歴史的伝記ではなく〝イエスをキリスト（救い主・メシア）神の独り

子〟と信じた原始教団の信仰的な「キリスト論文章」だと言えましょう。

これら四福音書はマルコが紀元六五年前後に記され、ルカとマタイは八五年前後、そしてヨハネが紀元一〇〇年頃に記されたと現代聖書学は教えています。そして、著者は個人の名で記されていますが、実際はイエスの周辺にいた人々がイエスについて自分の考えも含めて残した断片文章や口伝伝承が集められ、原始教団を座として編集されたキリスト論文章だと言えます。したがって、それぞれの著者のように記されている名前については、マルコとルカを除いて誰であるかは不明だというのが現在の結論です。

それにしても、意図的に福音書という文学類型を創ったのはマルコだと研究者は教えています。が，そのマルコなる人物がどのような人であったかということは、「二世紀以後の教会の伝説では、福音書記者マルコはペテロの通訳であって、ペテロが宣教に際して語ったイエスについての物語を書きとめたのだとしているが、それは伝説にしかすぎない……またコロサイ書四・十に記してあるマルコなる人物であるかどうかも不明です。」しかしその編集者の名前が「マルコ」と称される人物であることは認められているようです。

とにかく、イエスの十字架刑による死後三十年から六十年を経た頃すでに、ダヤ教その他の宗教との関係に於いて、「イエスとは何か」という論議が教団内外で論じられており それ故に原始教団は「イエスこそ神の独り子キリスト（メシア）である」と言う〝キリスト論〟を折衝的に表明したのです。その片鱗が例えば、マタイ・マルコ・ルカによる福音書に共通して記されているイエスと弟子たちがピリポ・カイザリヤ地方で交わした問答形式の記事は、当時の教団がおかれていた状況が生み出した折衝的記事だと推察できます。

その記事は以下のとおりです。

「イエスは弟子たちに問われた『人々は、私を誰だと言っているか』弟子たちは言った『洗礼者ヨハネ、またほかの者たちはエリヤ、しかしまたほかの者たちは預言者の一人だと言っています』するとイエスは弟子たちにたずねた。『しかし、あなたたちは、私を誰だと言うのか』ペトロは答えてイエスに言う。『あなたこそキリストです』（マルコ八章二七節～三〇節）

しかし、この記事はマタイになると『あなたこそキリスト、活ける神の子です』と『活ける神の子』が付加されている。（マタイ一六章一三～二〇節）

その後、原始教団はますます強固な信仰集団となり、やがて組織としての教会全体のキリスト論を正典又は聖典化するために政治（ローマ）や哲学（ギリシャ哲学）、他宗教（エジプトやペルシャの密議宗教）等とのさまざまな関わりと習合をも経て、現在の形の旧約新約聖書の目次が公認され、（但し旧約聖書には外典まで加えられている）キリスト教会の信仰基準として認められたのがニケア会議を経た後、三九七年のカルタゴ会議に於いてです。

〔しかし、聖書の正典化については、その後も紆余曲折があり、旧約聖書については1五四六年に開かれたトリエント総会義に於いてラテン語訳旧約聖書（ウルガタ）に含まれるすべての文書を正典とし、更にヴァチカン総会義は一八七〇年にそれを追認した。だがプロテスタント教会はヘブル語聖書に含まれてないものは正典と区別して外典または偽典として取り扱うようになった。一方ユダヤ教の聖書（旧約）の聖典化は九〇年と一一八年にヤムニア会議で決定された。〕

ついでに、付け加えますと、

〔★日本に於いては、一九八七年にカトリック教会とプロスタント教会との「共同訳聖書」が日本聖書協会から出版され、旧約聖書には「旧約続編」として外典が入れられた。この事は、今日のキリスト教会がどのような時代状況にあり、それに対してどの様に対応して行けばよいのかという一つの現れであり、その決断は正しいと思うが、未だ十分とは言えないのではないだろうか。にも関わらず、根本主義教団は、旧約の続編付聖書を否定しています。〕

☆注・「根本主義（ファンダメンタリズム）」には大きく分けて広義と狭義の二つの立場があり、ここで言っているのは狭義の立場です。その特徴は「聖書の権威やそのテキストの文字通りの解釈についてよりも、聖書の無謬性の主張にあります。」つまり、聖書の言葉は直接神の言葉（逐語霊感説）であり、真理を語っているので、それに対し、同意することだけが信仰であり、同意以外の応答は不信仰と見なされる。天地創造や罪と贖い、再臨、処女降誕、奇跡、黙示録の地獄での裁きなど聖書の文字どおりの解釈など、それらを「根本」として最も重視する立場を言うのです。

話を、前に戻して、

ここでもう一度くりかえし申しますが、キリスト教会（新約聖書）のキリスト論の中心は「イエスこそ神の独り子キリスト（救い主・メシア）である。」ということです。しかし古代の教会で、そのイエスが問われた内容とは、〝人間であるイエスが同時に神の独り子〟であるとはどう言うことか？、ということでした。つまり、イエスに於ける神性と人

性との矛盾について、どのように解釈をすればよいのかということです。この論議は古代教会に於けるもっとも重要な論議でした。そして、先述のとおり「ヘレニズム・ローマ世界のさまざまな密議や救済宗教との対決」その為の弁証または折衝として三位一体論もそこから生じて来たのですが、このキリスト論に一応の決着がついたのは三〇〇年余の時間をかけてようやく、それも、皇帝（マルキアヌス）の権威によって招集されたカルケドン公会議です。それは四五一年に開催されたのです。教会史によると、その時の宣言文は次のとおりでした。参考までに記しておきます。

「唯一かつ同一の」イエス・キリストは「「真の神であり、真の人間」であり、「神性において父と同一本質の者（ホモウーシオス）」であり、かつまた人性においてわれわれと同一（ホモウーシオス）であり、「二つの本性において混合されることなく、分別されることなく、変化することなく、分割されることなく、分離されることがない」

☆注・「ホモウーシオス」とは、実体ないし本質を同じうするもの。同一実体の意。キリストに於ける神人性という事態は、単に特殊な教理論争の枠を超え、人間の自然本性（ビユシス）が神的本姓を受容しそれに与かりうることの可能根拠なのでした。

「神が人に成ったのは、人が神に成る（神的生命に与かる）ためである」という」アタナシオスの言葉は、東方教父の伝統の中心なのです。（岩波キリスト教辞典参考）

☆注・古代教会では「贖罪論」は、中心的な論議の主題ではありませんでした。贖罪論が出てくるのは「神の義」と人間の断罪との関わりにおけるキリスト論の一つとして十一世紀にカンタベリーのアンセルムス（一〇三三年～一一〇九年）においてです。彼は

中世の代表的な神学者であり哲学者。古典的な三位一体論と贖罪論を確立した人と言われています。彼の「理解せんがために信ず」という言葉は有名です。

☆注・イエスの人性と神性の関係についての私の信仰理解は本論で語らせていただきます。

しかし、それでも、反カルケドン派が異議を唱え、その結果結局「キリストに於ける両性の主体を先在のロゴス、神の子」とすることでカルケドン信条は補完されることになったのです。

このように古典的教義決定以後十二世紀～十三世紀、宗教改革期、特に十二世紀以降宗教改革期までのキリスト論論争は政治絡みの宗教的な権力闘争も含めた凄惨な異端審問が行われ多くの誠実な信仰人がその地位の如何に関わらず、神の名により異端と決めつけられ焚刑で抹殺されていきました。このようなキリスト論論争の状況は、現代のキリスト教会においても教条主義的な異端審問体質は基本的には変わっていません。つまり中世ヨーロッパに於ける教会のコンスタンチノ―ボル的体制は今も教会内に残存し、その教条からの呪縛は解けてはおらず、排除の論理は現実に働いています。しかし、歴史的な現実は、もはやそのような教会の体質を許さない状況が実際にさまざまなかたちで迫りつつあります。その歴史的な状況を聖霊の促として受け取ったロ―マカトリック教会は、一九五二年から六五年の三年の年月をついやし第二ヴアチカン公会議を開催し、幾多の困難を乗り越えて一大改革を断行した。この公会議の中心主題は教会論でしたが、当然キリスト論にも深く論議が及んでいる。　特にこの公会議に於ける注目すべき一つは、「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」であります。次のように公文書は宣言して

いる。「カトリック教会は、諸宗教の中に見いだされる真実で尊いものを何も排斥しない……すべての人を照らす真理の光線を示すこともまれではない。」「古代から現代に至るまでの諸民族の（宗教の）うちには…時には最高の神、あるいは父なる神についての認識さえみとめられる」と、ある。しかし、神学的には包括主義であることを確認しておかなければならないでしょう。でも、「キリスト教以外の諸宗教との真摯な対話を可能にし現代思想との対話のために道を開いた」ことはカトリックの歴史に於ける一大快挙だといえるし、それは当然の事だと思う。しかし、この改革も更なる改革を求められている程に教会の置かれた時代状況は厳しい。その点、キリスト教神学の分野ではともかく、プロテスタント教会の現場は、未だにコンスタンチノ―ポル体制の呪縛から開放されぬままの体質に留まっているようです。それは、カトリック教会の伝統と異なり聖書原理に立つプロテスタント教会の信仰の体質によるものなのでしょうが、現代の状況は、その「聖書原理そのものの再検討が神学的に問いなおされているのではないかと思います。その意味で、」私個人としての思いは、言わば崩壊しつつある教会にしがみつき、当の聖書原理を深く問いなおすことをせず、ただ、同語反復することで安易に自己満足している姿に見えてくる。このような教会の在り方に危機感を覚えるのは私の誤りであり、思い過ごしでしょうか。

教会の将来に危機感をいだき憂いながら、二一世紀の教会の在り方を真剣に問いつづけ神学的努力とその提示とをしている求道的学者がおられるが、その人達を日本の教会は教条的に異端者扱いをせず、その人達の提示に謙虚に耳をかたむけてもよいのではないだろうか。

結局、キリスト教信仰の問題の中心は「キリスト論」だと言える。そして現代状況は、

キリスト教会のコンスタンチノポリス体制に対して、厳しく問いを投げかけている。

☆注・第二ヴアチカン公会議以降のカトリック教会の会堂の設えは一変しました。現在一九六二年以前の設えをもった会堂はどこにも在りません。勿論、礼拝（ミサ）の仕方も大変化しています。

☆注・第二ウアチカン公会議を神学的に主導した一人がカトリック神学者カ―ル・ラ―ナ―（一九〇四～一九八四年）だと言われている。彼の「包括主義」とは、「神の救いの御恵が創造された世界と良心の中で働くとするなら、目に見える教会制度の外の何処でも常に働き、キリストと教会に結び付けている」と考える。それ故に、その恩恵がどんなに不完全なものであっても、それぞれの宗教によって媒介されており、その恩恵にそこで応えるとするなら、その者は「無名のキリスト者」なのだという。つまり、すべての宗教は「無名のキリスト教」として「包括されている」というのです。しかし、この考えは非キリスト者に対しては屈辱的で帝国主義的であると批判も出ている。それは例えば、仏教界の人がすべての人は、そして宗教は、「無名の仏教徒」「無名の仏教」だというのと同じだからです。カ―ル・ラ―ナ―の難しい神学論は、私の器量では及びませんが、先のような包括主義は帝国主義的だと批判されるのも尤もだと思います。尚付け加えておきますと、一方では、「キリストのみ」という立場からは、キリストの原理を実質的に放棄するものだという批判があるようです。

十八世紀に至るまで、キリスト教信仰にとって、聖書の内容すべてを無条件に受け入れることが信仰の基礎でした。しかし、「史的批評学」または「聖書批評学」は、そこにあ

るさまざまな矛盾を学問的に検証するこで「聖書にそのように記されてあるから」という理由だけで、そのまま受け入れられないことを指摘したのです。そのような学問的な探究作業は三〇〇年近い時を経て今日に至っています。このような観点から聖書の文字（言葉）を唯一の神の言葉、唯一の真理の文字（言葉）として無条件に受け入れることは、妄信的な聖書文字信仰であって、それは正に聖書を偶像化した自我による幻想信仰であり、そのようなキリスト教信仰はただの「キリス教ごっこ」にしかすぎないと思います。それはイエス当時の熱烈律法文字主義信者であったパリサイ宗の人々と同じであります。彼らにイエスは「聖書を調べてみるがいい。あなたたちは聖書のうちに永遠の命を持っていると思い込んでいるのだから。だが、それは「わたし」について証しするものなのある。それなのに、あなたたちは命を得るためにわたしのところへ来ようとしない」と嘆かれた。（ヨハネ福音書五章三九節以下）―ここで言う「わたし」とは、直接歴史的なイエス自身のことではなく、イエスをイエスたらしめているイエス自身のリアリテイ、つまり、イエスをイエスとして活かしている超越的且つ根源的な大いなる命のたぎりそれ事態、それを「キリスト」と言う。そのキリストを「わたし」と言われたのです。―また、かってパリサイ宗のリーダー格であた使徒パウロも自分自身の体験もふまえて次のように彼らの問題点を指摘した。「彼らが神に対して熱烈に情熱をもっていることは証明しますが、それは深い信仰の智慧にそったものではありません。それは、彼らが神の深い智慧、つまり、超越的且つ根源的な大いなる命のたぎりを知らないで、自分自身の判断による知恵で自分自信を正しく作り挙げようとし、神の深い智慧に従わなかったからです。」（ロマ一〇章二

節以下）

☆注・新約聖書を歴史的な視点から批判的に研究する学問を一括して「新約聖書神学」と言うようです。新約聖書の中の福音書研究の結果、次のようなことが一般的に認められています。詳しいことは専門書をごらんになればよいと思いますが、現在常識となっています研究結果を紹介しておきます。福音書のうちマタイ・マルコ・ルカは、マルコ福音書を下敷きにして書かれたので、それらは言語的、内容的に共通の部分があり「共観福音書」と呼ばれています。そして、共に資料として用いたと推測出来るものが存在したのではないかと思われ、それ故に「二資料説」と言われています。その後、研究は、ますます進み、特に第二次世界大戦後の研究は目ざましく、福音書研究の方法論は次のように推移していきました。「様式史研究」から「編集史的研究」へと。

●様式的方法

福音書が書かれる以前、福音書に使われた資料は口伝によって伝えられていた。しかしその口伝が伝承される場合、例えば、礼拝の必要とか周囲の人々に対する弁証とか。があったはずで、その場によって口伝は特定の「様式」を与えられる。その場を「生活の座」と言うが、その様式を脱色することによって、史実により近い伝承に至ろうとする方法です。

●編集史的方法

福音書の著者が口伝によって受け取った資料を用いてそれぞれの福音書を書いたわけだが、その時資料に加えた削除や訂正を推定して、それによって各福音書の言わば、編集の意図を察知するのである。それによって逆により古い伝承の層を類推する事ができるという方法です。

● これらの方法は新約聖書だけに適用された方法ではなく、広く古典的文書研究のために広くヨーロッパで用いられた手法です。

☆注・尚、この研究方法は新約聖書の書簡（手紙）にも用いられ、十三あります手紙の内ロマ書・コリントⅠとⅡ・ガラテヤ・フイリピ・テサロニケⅠ・フイレモン書七書簡（手紙）だけが、パウロが記したものとされています。

結局、律法主義者パリサイ宗の人達は、「律法主義ごっこ」をしていたのです。その意味で私たちの求道も「聖書文字ごっこ」に終わってはならない。

「ごっこ」とは子供がなにかのまねをして遊ぶことをいうのですが、それは自我の観念の世界で自分が構築した思い込みの世界です。その意味で、「客観的に聖書（律法）の文字が即神だと思い込み」その思い込みに基づいてそれを、自分の生き方、在り方の尺度とするなら、その生き方や在り方は「聖書文字ごっこ」と同じです。つまり、「我」で聖書の言葉を抱え込むこと、上田閑照氏の言い方で言えば「『我』が神を所有する」ということです。その時その『我』は「巨大な『我』となる」と。それが「ごっこ」的行為なのです。しかし、当の者はそれと気付いてはいない。イエスはそれをパリサイ宗の人の信仰に見たのです。

聖書の言葉は人間存在の超越的な究極的な支え、根拠根柢を証示している表現言語、証示の言葉なのです。その超越的且つ根源的な大いなる創造的命のたぎりに開眼することなく、恵まれた！。救われた！。感動した！などと思っても、それは所詮「我」の世界内の出来事ではないかと、厳しく問わねばなりません。真に、「超越的、根源的な大いなる命

のたぎりその事、つまり自我の究極的な支えに開眼するためには、自我を完全放棄しなくてはなりません。そのことについてエックルハルトはその講話で言います。「人はいかなるものも求めてはならない。認識も知も内面性も敬虔も平安も、一切求めてはならない……人が放下（捨離）し得る最高にして究極的なことは、神を神のために放下することである。さらに彼は言う「信仰を放下する」ところに真の信仰がある、と。

自我の思いで抱え込んだことは、すべて「ごっこ」的な行為なのです。「ごっこ」は結局自己満足であり、「我」が生み出す一夜の夢なのです。それは、夢のように消え去ります。だからこそ、イエスは「自我心を放下した者は、自我の根拠、根柢の大いなる命に開眼する」と言われたのです。（マタイ五章三節）また、使徒パウロは「肉の思い（自我で抱え込む）は死であり、霊の思い（自我を超えて自我を支える創造的な命のたぎり）に生かされれている自覚は「命と平安とである」と言いました。（ロマ八章六節）

はたして、私は、私の「我」が神を所有し、信仰を所有してはいないだろうか。「その時、しばしば巨大な「我」となる」と、そのエゴイズムを見抜いたエックルハルトの言葉を厳しく且つ深く嚙みしめたいと思う。

☆注・当時のパリサイ宗の「律法主義ごっこ」によって多くの民衆はさまざまな被害をうけました。例えば、ヨハネ福音書八章一節以下に記されている「姦通の女」に対する彼らの関わり方もその一つです。律法（聖書）の言葉を絶対の尺度（神の権威）とし、その文字で人を物のように計測し、有無を言わさず女を罪人（不良品）と決めつけ、聖書（律法）に記されてあるという理由だけで石打ちの刑で女を平然と惨殺（廃棄）するそ

の心情は、もはや彼らは血も涙もない律法に操られた無情な物体化したロボットにしかすぎません。ここで思い出すのは、満員の地下鉄電車の中で、サリンを平気で撒いたオウムの熱烈信者の犯行です。彼らは近代的な高度の知識と技術の持ち主だったことを忘れてはならない。また、イスラム原理主義者の他宗派の民衆に対する誤ったジハード。主義主張を含めた宗教による「我の肥大化」による統一化現象がもたらす狂気凶暴の恐ろしさを思います。

それにしても、「姦通の女」に対するイエスの対応に接するとき、単なる慰め以上に、自我を超えた人間の内に既に在るが、しかし隠されている霊性への喚起を促され、歪んだ自我が真っ当な自我へ連れ戻される思いがします。イエスの存在の意義はここにあるのはないでしょうか。つまり、徹底した赦しは即徹底した裁きであり、且つ、真っ当な人間へと戻る促しなのです。

イエスは言われた。「お前たち、律法の専門家（聖書文字絶対主義者）どもも禍いだ！お前たちは、人々に担いきれないほどの荷（律法の規定）を負わせるが、お前たち自身それによって苦しんでいる人々に指一本でも触れようとはしない。（ただ裁くだけだ）（ルカによる福音書十一章四六節）

☆注・「真っ当な自我」「歪んだ自我」とは、次のことを意味しています。

私たちは「自我」を捨てることは出来ません。なぜなら、「私が私であると自覚しているのが自我」だからです。自我を捨てれば、私は私ではなくなります。問題は、その私を、「私に拠って私だ」と〝私の究極の根拠を私とする自我〟が「歪んだ自我」

ということです。一方、”私は私だが“　”私の究極的根拠は私を超越した大いなる命のたぎりであり、その　創造的な大いなる命が私の究極的根拠である生の事実（リアリティー）に開眼自覚している自我“を「真っ当な自我」というのです。つまり「真っ当な自我」とは「本来の人間のありよう」だといえます。そのような、当たり前の人間をイエスは、自然態で行じたお方なのです。

聖書は、情報の言語ではありません。聖書は、人間存在の根拠、根柢、創造的な命のたぎり（キリスト）の証示の言語だということを確認しておかないと、聖書の読み違いをしてしいます。だから、イエスは、聖書は「わたしについて証示するものである」と言われた。また、パウロは「神の義（神の深い智慧）を聖書から得なさい」と言ったのです。

☆注・ここで大切な問題は，イエスが言う「わたし」とは何か、とう言うことです。これについては後でご一緒に考えたいと思います。

☆加えて、ここで確認しておきたいことは、「イエスは神の独り子キリスト（救い主・メシア）である」というキリスト論には「イエスに於いてのみ人は神を知り関わり、イエスを通してのみ人は救われるのである」というメッセージが含まれていることです。

このことは、今日的な意味でとても重要な問題性を含んでいます。それは、人が神を知り、神に関わる事が出来、神に救われる事が出来るのは、「イエス・キリストを通して啓示された神だけである」ということです。他のどのような宗教の神も、それは本当の神ではない。偽りの神、悪魔の神であり、それゆえにその宗教や神は滅ぼさなくてはならない

というメッセージが含まれていることです。それは、イエス以前には、正しい神を人間は知らなかった！、又は、いなかった！ということになります。

その意味で、かって、非西欧の植民地での宣教は、正しい神を伝えるために〝土着の宗教・文化の徹底的な抹殺〟だったことを反省的に認めざるを得ません

つまりキリスト教の絶対主義的排他性が古典的キリスト論では絶対の真理として、その基盤に有るということです。そして古典的キリスト論を支える根拠が、絶対の権威をおびたイエス・キリストの使徒による言葉としての新約聖書だというのです。「聖書にそのように書かれ証示してあるからだ！」というのが絶対の真理性の根拠なのです。ここでの問題は、「聖書に書かれ証示してあるから」という、「書かれ証示してある」とはどう言うことなのかと言うことを深く問わないままで、一方的に「聖書は神の言葉だから」と言うだけで〝正しい〟と決めつけるのは独断・独善と言われてもしかたがないのでは、と思います。自分勝手に〝お山の大将、僕ひとり〟では現代社会に通用はしません。聖書の言葉が絶対正しい神からの情報言語と思い込むとき、必ずそのようになります。

先にも言ったとおり、聖書の言葉は情報言語ではありません。単なる情報言語ならばその情報の一言一句の文字は大切です。

例えば「A地点でトラックと乗用車とが正面衝突して両方の車が炎上し、乗っていた人達が死亡した、という情報は、実際A地点に行ってその通りだったら、その情報言語は正しいということになります。しかし、その地点に行って自動車事故の出来事が何も無いなら、その情報は嘘の情報になります。このように情報言語は常に出来事について正しくなければならない言語なのです。その意味から言えば、福音書に記されてあるイエスを巡る

出来事の裏付けは何もないのです。それは厳密な意味で情報言語ではありません。

にも拘わらず、聖書に書いてあるから神の言葉として「そのまま信じなさい。信じなさい」と言われても、普通の人ならすぐには「はい」とは言えません。ましてや、福音書に記されてある〝出来事〟をそのまま信じ、その〝出来事に寄り掛かって〟安心して生きて行け「と言われても？」と思うのは極めて健康な受け取り方ではないかと思います。

勿論、何度も、何度も言われ、聞かされている間にその気になるということがあり、また、その時のその人の精神的な状態が〝藁をもつかみたい〟と思うほどの場合には、その出来事にそのまましがみ付くということになるやも知れません。

このように、私が申しあげますのは〝聖書が正しくない〟と申しているのではなく、聖書の言葉を単に「情報言語」として受け取っては、聖書が示す大いなる命の世界を見失うことになりまよ、と申しているのです。そして、聖書の言葉は「証示の言語・表現言語」として信仰的、霊的な智慧を聖霊さまからいただいて、謙虚に素直に聞きましょう、と言っているのです。そうすれば、今よりももっと多くの方々が聖書の素晴らしさに気付くようになるに違いなと私は思っています。

何度も申し上げますが、聖書は証示の言語、または表現言語なのです。つまり、そこに記されてある文字や出来事を通して、文字や出来事を超えた超越の世界を証示し表現しようとしているのです。顕在的な世界（現実の世界）は、見える世界です。私たちはそこに生きている者です。ですから、超越の世界は見えません。しかし、超越の世界と顕在的な世界とは別々でありながら、同時に分けることことが出来ないままで、私たちの生きる現

場にあるのです。それを〝不可同・不可分〟と言った人（滝沢克己）がいます。この言葉は「不可逆」という言葉を加え、深い意味を持っており、私も用いさせていただきます。

例えば、パリサイ宗の人が「いつ神の国（神の支配）は到来するのか」とイエスに問うたときイエスは「神の国（神の支配）は、観察しうるようなさまで到来することはない。人々が「見よ、ここだ」とか「あそこだ」などと言うことはない。なぜならば、見よ、神の国（神の支配）は、あなたたちの現実の只中にあるのだ」と申されました。（ルカ福音書一七章二〇節）

イエスが証示されたことは、神の国（神の支配・神の命のたぎりその事・神の創造的な大いなる命の働きその事）は、顕在的な世界に生きる者には、それ自体は直接見えない、その意味ではこの顕在的な世界と神の支配とは不可同であるが、同時に、神の支配は「あなたたちの現実の只中に厳としてたぎっているのだ」と言われた。つまりそれは顕在的な世界に生きる私たちにとって不可分として創造的にたぎっている。と言うことです。

この事と関連して、もう一つの例を見てみましょう。それは、マタイ福音書六章五節以下にあるイエスさまが「祈りについて」お語りになったところです。

「あなたたちが祈るとき、偽善者たちのようになるな。彼らは、人々に見られるために会堂や大通りの角に立って祈るのが好きでたまらないのだ。アーメン、あなたたちに言う、彼らはその報いを受けてしまっている。むしろ、あなたが祈る時は、あなたの奥の部屋に入り、あなたの戸に鍵をし、隠れたところにおられるあなたの父に祈れ。すると、隠れたところを見ておられるあなたの父があなたに報いて下さるだろう」。

ここでイエスが語る「隠れたところ」とは何処なのでしょうか。それは〝超越の世界で

あり、創造的な大いなる命がたぎる場“のことだろうと思います。つまり、イエスがここでパリサイ宗のセンセイ達に言いたかったことは、”あなた方は「律法に基づいて！、律法に基づいて！（聖書に基づいて！、書に基づいて！）」と説き、熱心に信徒の前で祈っておいでだか、それは少し思い違いをしておられるようです。祈りというものは、人に見えるところであろうが、人里を離れた山の奥であろうが、要するに、自分の世界で言葉するものではありません。即ち自分を自分から断ち切らないままで、自我そのままの思いで神を立てて、そこで祈るということは、結局、自分の世界の中での独り言のようなものです。それは自己満足という意味で「すでに報いを受けているのです」。祈りというのは、街中であろうが、密室や山の奥であろうが、そこが顕在的な世界から超絶していて、同時に顕在的な今、私達が立って生きている場、即ち、すべてをひっくるめたその命の根っこ、命の成り立つ根源、つまり創造的な大いなる命のたぎりの場に自分を置いてその命を喜び、その命と同時的になるそここそが、「隠れたところ・祈りその事の現場」なのです。パリサイ宗のセンセイ方よ！その現場では、神は「あなたが祈る前にすでにあなたたちの必要はかなえられているのですから。」とイエスは言われる。

「あなたたちは祈る時は、他の宗教の人のように駄弁をろうするな。彼らは自分たちの言葉が多ければ聞き入れてもらえると思っている。だから、彼らの真似をするな。なぜならば、あなたたちの父は、あなたたちがお願いする前に、あなたたちの必要なものを知っておられるからである」。（マタイ福音書六章七節以下）

イエスのお言葉は、とても明快です。こころの底からアーメンと言えます。

聖書の言葉や出来事は証示であり表現なのです。それ自体は相対的なものです。しかしその相対的な言語や出来事を通して露になって来る絶対的な世界即ち命の成り立ちの根っこの世界は霊的に知る事ができるのです、なぜなら、顕在の世界と超越の世界とは不可同不可分だからです。

にも拘わらず「聖書にそのとおり書いてある。書いてある！」とその文字を振りかざし聖書的、聖書的と言うなら、その文字に縛られ、それを事実また規範とし、それによって統一化されるなら、そして、そこからキリスト教信仰を出発するなら、その信仰は自我からの出発となります。イエスはその点をパリサイ宗の人々の信仰の根底に見抜き、〝お前たちの熱心は自分で作り上げた信仰ごっこ、律法ごっこ、聖書ごっこにしか過ぎない。なぜなら、肝心の自我を超えた超越の世界（神）が不在だからである〟と言われたのです。

そこで、どれほど喜びに満ちても、安心を覚えてもそれは所詮は自己満足にすぎない、と言うことを鋭く洞察しなければなりません。それは信仰の〝魔〟です。

しかし、当のパリサイ先生たちは、イエスのその言葉が何処から出てきて、何を示されたかまったく理解出来ませんでした。それどころかそれを「律法違反だ！神を冒瀆する者だ！」「イエスは悪魔の頭だ！」と、ヒステリックに叫び、最後にロ―マの権力を借りてイエスを十字架にかけ、神の名のもと、民衆の前で惨殺してしまいました。まさに、倒錯した宗教ごっこ、律法ごっこの底が見え透いた茶番劇を演じたのです。だが、それはあまりにも悲惨な出来事です。

私たちの求道も、この信仰の「魔」に陥ち込んでいないか、深くその信仰を吟味し続けたいと思います。なぜならヨ―ロッパ中世の教会は、異端審問で同じことをしたのですか

ら。その意味で、プロテスタントの精神とは、神の前での自己否定の精神であるところにそのまともさがあるのです。

だから、パリサイ宗の人達にイエスは言われた。「禍いだ、おまえたち律法学者パリサイ人よ、偽善者どもよ。お前たちは杯と皿の外側を清める。しかし内側では略奪と放縦さに満ちている。盲目のパリサイ人よ。杯の外も清くなるためには、お前はまずその内を清めよ。

「禍いだ、お前たち律法学者とパリサイ人よ、偽善者どもよ。お前たちは石灰で白く塗れらた墓そっくりである。外側は美しいが、内側は死者の骨とあらゆる不浄に満ちているこのようにお前たちも、外側では人々に義人らしく見えてはいるが、内側は偽善と不法で満杯だ」（マタイ二三章二五節以下）

ここでイエスは、パリサイ宗の人達が、うわべを飾って、内側の心や行いを正しいように見せかけている、という通俗的な偽善の事を指摘されたのではありません。私たちは、このイエスの言葉をそのように受け取り、「私は偽善者の一人です。罪深い者です」などと、単なる道徳的な、また安っぽいヒューマニズムの観点から、分別臭く嘆いたり、悔い改めたり、ときとして他人を責めたりします。少し困るのは、この種の説教を、牧師が礼拝で講壇から声高に語ってくださることです。しかし、イエスはそんな道徳的な次元のことを語っておられるのではないのでは思います。

イエスがパリサイ人に提示しておられることは、人間の成り立ちの根柢に、すでに無条件に満ち満ちている恵みとしての大いなる命のたぎり、その大いなる命が人間の側の一切の計らい、即ち、善行も信仰も律法（聖書）も、祈りも、修行も、善も悪も超えて、有限

なる人間として生きることを許されている、その絶対無としての命の場を、「内側」と言われたのです。その一切に先立って無条件に成り立つ命の根源である「内側」に開眼しないままで、自分の思い（自我）で律法（聖書の文字）を抱え込んで、さも一人前の信仰人とし人々の前に立っている、その在り方をイエスは「偽善者」と言われた。だから、イエスは「盲目のパリサイ人よ。杯の外も清くなるために、お前はまずその内を清めよ！」と言われるのです。「清めよ」とは、本当の内側にたぎる大いなる命に開眼せよ！ということです。私たちが「イエスとは何か」と問うのは、一人のキリスト者として自覚的に主体的に自分自身の信仰を確認したいからです。今、謙虚に真摯に自分自身に問いたい。「お前にとってイエスとは何か、誰か」と。さあ、あなたは何と答えるか！。

話を、もう一度「四福音書」に戻そう。

以上の意味で「四福音書」を、神の直接的な言葉として絶対視し、その文字を直接人が生きる唯一の拠り所とするなら、それはこの世の相対的な物を、神化（偶像化）したことになりその結果自我の生み出した偶像で自分自身を縛り、最後は繋驢厥（けろけつ）状態に追い込まれ自分を殺してしまうニヒリズムに陥ることになります。これは信仰の「魔」の一つだと思う。使徒パウロはその魔を鋭く見抜き、「文字は人を殺す、しかし霊は人を活かす」と言いったことは先にも述べたとおりです。

「四福音書」は、「イエスを救い主（キリスト）と信じた原始教団の信徒の「信仰の文書」つまり「キリスト論」であることを確認しておきましょう。ならば、私たちは、自分の「キリスト論」を信仰に於いて確立する事こそが大切なのだと言えましょう。それはと

りもなおさず、「あなたは、私を誰というのか！」と言うことに実存的に応答することにほかなりません。

しかし、自分勝手に各自が「キリスト論」を展開することはできません。なぜなら、当のイエスについての資料が新約聖書の「四福音書」しかないのですから。勿論新約聖書の外典と言われる資料は沢山書かれていますが、その内容はあまりにも「イエス伝説物語り風」で歴史的なイエスを知る資料には誰が見ても相応しくないようです。ならば、新約聖書の四福音書を批判的に検証して、そこからイエス像を出来るかぎり取り出す学的な作業が必要になるのです。それが先に「注」において記しました福音書の「様式史研究や編集史研究」です。このような作業がなされるようになった背景には、私たちが歴史意識に目覚めて、はじめて可能なのです。厳密な意味で人々が近代的な歴史意識が生じたのは十八世紀後半であり十九世紀に於いて本格的に展開されるようになります。それまでは、「聖書は一字一句神の言葉」という信仰に基づいた教義学のもとで、キリスト論が構築されており、言わば「聖書」はそのまま「神の言葉・聖なる文字」としてアンタッチャブルな本のなかの本、唯一絶対の書物だったのです。ですから、イエスとその生涯に関しては四福音書を全体的に調和すればイエスの正しい伝記が、つまり歴史的なイエス像が描けると信じ、それに異論をとなえる者は「異端」として排除のレッテルを貼り、時には悪魔と決めつけ殺害したのです。そして、聖書は「字義解釈の他に道徳的解釈、寓話的解釈、類比的解釈が行われ、それぞれ教義を説明するのに都合よく用いられていたのです。なぜ、聖書は神の言葉であり、そのまま信じて受け入れる事が正しい信仰であるとする聖書の権威根拠の一つは、神の独り子イエス・キリストが任命した使徒的権威による絶対的な真理とし

ての受け取られていたからです。その延長線上にローマカトリック教会の教皇はキリストの代理者としての不謬権があるのです。〔☆「教皇不謬権」は第二バチカン公会議でも承認継承された〕

この事と関連して例えばルターの「宗教改革」の批判的原理は「聖書原理」でした。それは「聖書の権威と真理」ということなのですが「その権威の性格およびそれがどのように執行されるか」さまざまな論議がなされ、この問題も今日においても議論されているようです。

いずれにしても「歴史批判的視点を聖書に適用することによって、近代聖書学が誕生したことは、〝聖書を教義学から開放した〟」と言えます。

今日、聖書を学ぶ場合にそれを肯定するか否に関わらず、必ず「聖書の歴史的批評学」を無視してはならないと思います。特に、聖書が秘めている福音を人々に伝えようとする者は、そのところを無視するとき、自らの独善的信念信仰に陥り信徒をして人生を迷走させかねません。イエスは言われた「禍だ！お前たち律法学者とパリサイ人よ、お前たちは海と大陸をかけめぐって、一人でも改宗者を作ろうとする。そしてうまく行った時は、彼をお前たちに倍して地獄の子にしてしまう。」（マタイ二三・一五）本当にそうだと思います。私の場合、「聖書の歴史的批評学」についての専門的知識はありませんが、今日では誰でもその研究成果を解説した書物は入手する事ができ、言わばその知識は一般的に簡単に得ることができます。私の知っている牧師さんの何人かは、「あれは悪魔の書書ですから読みません」と真剣な顔をしておっしゃった。

そこで、最近、私の身近で起こった一つの悲しい出来事を紹介しておきましょう。それはCさん一家に起こりました。Cさんは京都でも古い或る老舗の一人娘さんと結婚し、養子としてその家に入られました。しかし、その娘さんは二人のお子さんを残してお亡くなりになりました。その後CさんはEさんと再婚しましたが、故あって、Cさんと離婚された後、Cさんは若いTという女性と三度目の結婚をなさったのです。しかしお子さんは最初に結婚なさった方との間に生まれた二人のお子さんだけでした。ところがそのお子さんの一人である娘さんが、日本でも比較的広く伝道活動を展開している聖書的と言われるキリスト教の集まりに参加するようになって、その後、とても熱心にキリスト教の集まり参加されるようになり、遂に、三人目のCさの奥さんにも勧め、二人してその大小の集いに遠近に関わらず参加し、救われた！救われた！と歓喜にひたり、相手かまわず勧めるようになり、Cさん、つまりお父さんも救われなければということで、奥さんと二人して集会に連れて行くようになりました。Cさんも少しづつ感化され、最後には洗礼を受ける日時まで決める程に決心なさいました。ところが、その前に、婿入りした老舗の宗教と決別して心身ともにキリストに捧げることを勧められ、遂に何百年も続いた老舗の先祖さんたちが大切にして来た立派な仏壇を、多くの信徒が集まる前で、「偶像礼拝の象徴の仏壇の焼却」という宣言のもとで、勝利の讃美歌を合唱しながらすべてを灰にしてしまったのです。その時の写真が大きく、その教団の発行する機関冊子にカラー写真で大きく掲載されました。その見出しに「偶像との決別にC兄弟もすっきりした面持ちで見守っていた」と記されてありました。その場面をよくみるともう一つの少し小さな仏壇も同時に焼却されていた

ました。

ところが、いよいよCさんが洗礼を受ける前日、奥さんと娘さんとは他県で行われる特別集会に参加している間に、Cさんは風呂場で自殺してしまわれたのです。

Cさんの葬儀に参加された私の知人が、言いました。「……奥さんも、お子さんも、そこに集った信徒達も、Cさんは天国に凱旋した！天国に凱旋した！と讃美の声で満ち満ち……」と悲しげに語る彼の目には涙が溢れ、その心身は呆然自失、そして憤怒のため身は震えていました。自殺したCさんの本当の心情は如何ばかりであったのでしょうか。

私は、この事ににについて、なにもコメントすることは出来ません。ただ、怪しげな宗教集団に於いては、時としてこのようなことに類した事は起こっています。しかし、キリスト教の集団に於いても、実はこれに類したことは起こっているようです。勿論、すべてのキリスト教会がこれと同じだ、というのではありません。多くのキリスト教会は敬虔な祈りと、慰めと平安とに満ちた礼拝と信徒の交わり、社会への奉仕など行っておられます。

しかし、一神教の持つ体質に潜む、独善的な排他主義という所謂「宗教の魔」に、イエスが厳しく警告されたことを。そしてイエスご自身、その熱烈律法主義集団の権力によって十字架刑で神の名により惨殺されたことを忘れてはなりません。　自我で抱え込む神は自我が創りだした独善的な神であり、その神信仰に酔い、喜びだ！、感謝だ！というならその信仰は、まさに自我という麻薬が生む幻想にしたっているにしか過ぎないのではないだろうか。「人が捨離し得る最高にして究極的なことは、神のために神を捨てることである。……その時、その者に残され、留まったものは、まさに、それ自身において自体的自

存する神である。」「信仰を捨てることが信仰である」と説いたマイスター・エックルハルト（一二六〇～一三二八頃）と説いたこの言葉にもう一度注目したい。だが、そのように説いた彼自身、当時の教会から「異端者」とされたのである。過去、現在、そして未来に於いてもこのような「宗教」はさまざまな顔をして私たちの身近に存在するにちがいない。

さて、先にも申し上げましたが、

歴史的な批判研究の歴史をおおまかに項目だけ挙げますと、以下のようになります。

Ⅰ、「三資料説」　Ⅱ、「様式史的研究」　Ⅲ・「編集史的方法」　これらの研究をベースにしてイエスについて記した、手軽でわかりやすく、且つ客観的で、一般向きの解説書としてお勧めしたい一冊は、八木誠一氏の「イエス」（人と思想シリーズ・清水書院）です。〔但し、一般的に、教会の牧師さんたちは、又は各宗派の教会側は、この書物を信徒が読むことを危惧しているようです。これが日本の教会の現状です。〕

また、次の一冊も興味のある方はお読みになるとよいと思います。「ただの人・イエスの思想」柴田　秀　（三一書房）。この書は西洋の伝統的キリスト教を滝沢克己のインマヌエル「神われらと共にいます」の神学の立場から問いなおそうとするもので、そのためにR・ブルトマンの「イエス」を批判的に解釈しつつ、イエスの思想まで立ち還ることによって「西洋のキリスト教はもちろんのこと、さらに他の諸宗教・諸文化・諸イデオロギーを正しく導かんための道標たらんとする」ことを願うと著者は記している。

今回、「イエスとは何か」「イエスとは誰か」という主題を、掲げましたが、歴史的なイエス像を専門的に研究する器量はわたくしにはありません。ただ古代から現代に至る「イエス研究の歴史」の成果は知ることはできます。その結果は現在に於いては「歴史的なイエスの実像」は確定出来ないということがわかった、ということになるようです。今後どのような歴史的な資料の発見があるかはわかりませんが。唯一の資料としてある新約聖書特に福音書の研究を通して明らかになったことは、最初に申し上げましたとおり、それはイエスの歴史的伝記ではなく原始教団のイエスをキリストと信ずる信仰の書だということです。いみじくもイエス研究の碩学R・ブルトマン（1884～1976）という学者は歴史的なイエス研究書「イエス」において記した結論は「我々はこれしか知らない」と言えるものです。一方の碩学G．ボルンカム（1905～1998）は、その著作「ナザレのイエス」の結論として「我々はこれを全部知っいる」という姿勢の書のようです。ということ、現在の歴史のイエス研究の状況が両者の姿勢を通してとても興味深く、ある意味で全てを言い当ているようにおもえるのです。

聖書は旧約・新約を含めて、その内容は信仰告白の書だと言えます。例えば、旧約の天地創造の物語は、科学的な書として書かれてはいません。それは宗教的な宇宙論であり信仰における神話的な告白の書です。世界には「創世神話」がさまざまな形で各国・各宗教にあります。十年程前に、「創世神話の研究」という一冊がその中の著者の一人である友人の紹介で私のもとに謹呈本として出版社から贈られて来た。十二カ国のそれぞれの「創世神話」の研究論文が専門家によって記された力作である。編者の月本昭男氏は冒頭で次のように記している。

「いつの頃からであろうか、人類は自らをとりまく世界の初原に思いを馳せ、それを様々な物語に結晶させてきた。世界起源神話あるいは宇宙開闢神話と呼ばれる物語がそれで

ある。それらは無文字社会に於いては口頭伝承で、ときには祭劇や舞踊の形で伝えられ、文字が発達した地域では、古くから、さまざまに記録され、読み継がれ、解釈されてきたこうした物語が世界の起源を理論と実証とをもって探究した結果ではないことは、言うまでもない。人々は世界の起源をイメージ豊かに物語るなかで、むしろ、彼らが諒解する世界の本質・本姓をそれぞれの仕方で表明してきたのである。神話における起源論は隠れた本質論である。問題はそした神話を喪失したかにみえる現代のわれわれがどのような視座から読み解き、そこにたたみこまれた世界をどのように受けとめる、かである。…」

勿論、日本にも古事記や日本書紀に創世神話が記されてあるし、隠れキリスタンの旧約聖書創世記を変形した「天地始之事」という彼らの信仰による一書がある。そして天理教の「泥船航海記」という彼らの信仰による創世神話がある。とにかく、旧約聖書の創世記も古代イスラエルの宗教が周辺の様々な宗教の創世神話との関わりに於いて生み出された宗教的神話的表現の書物です。にも拘わらず、それを科学的言語（情報言語）と混同して、聖書は神の言葉であり、そこに記されてある事は歴史的事実として絶対正しいとするなら中世ならともかく現代に於いては、誰も真面目に相手にしないでしょう。（エデンの園が地上の何処かに存在したと信じている信仰者が現在でもいらっしゃる）しかし、未だにその混同が愚かな自我が神を（聖書を）抱え込み（所有し）、我が所有したそれを真理とするならそれは、信仰ではなく独りよがりの信念（我の肥大化した幻想）にすぎない。ここに所謂「宗教」の持つ独善が生まれ、反社会的、非社会的な悲劇が起こるのです。これについては、先にCさんの身に起こった哀しい出来事を紹介しましたが、文学作品として記した「悪魔の詩」を巡って、イランの故ホメイニ師はその著者であるインド生まれの英国の作家サルマン・ラッシュ氏に死刑の宣告をし暗殺者（刺客）を遣わした。そして、その暗殺者は、日本にも送り込まれ、その本を日本語に翻訳した筑波大学の五十嵐一助教授は

一九九一年に暗殺された。彼は四十四歳だった。犯人は不明のまま二〇〇六年に法的に時効が来てしまった。

たまたま、今日の新聞に帝王切開して赤ちゃんを出産した四十二歳のエホバの信者の婦人が、出血多量で死亡したという記事が大きく掲載されていた。エホバの証人宗教集団はご存じの通り「輸血」を聖書の言葉に反するという理由で拒否している。勿論、当人がそれを信じて輸血拒否をした結果、死亡したのだから、他人がとやかく言う立場にはないと思うが、果して、その輸血を拒否することが、聖書の教えを守る唯一の信仰者の在り方なのだろうか、それが、聖書の真理性とどのように関わるのかということは、よくよく考えなくてはならないと思う。一つ間違えは教典文字信仰は狂信・凶暴を、そして悲劇を生むということである。聖書の言葉は決して、絶対的な情報言語・指示言語・ではなく、超越的な世界を証示する言葉であり、その大いなる命の表現の言葉なのであることを、再び確認しておきたいと思います。

私たちが、イエスに向かい、イエスの弟子として生きた人々に関心をいだき、聖書に思いを向けるのは、それは何故なのでしょうか。それは、私たちが人間として実存しているからです。私たち一人一人は、かけがいのない自分の人生を日々生きており、その人生が幸いでありいと願っています。そのためにいろいろと考え、努力しています。また、その為に泣き、悲しみ、憎み、憎まれ、嫉妬し、嫉妬され、誤解し、誤解され、笑い、喜び、愛し、愛され、出会いと別れとがあります。私たちは、自分がそのために生き、そのために死ぬことができる本当の生き甲斐を求めています。これが人間としての実存的願望なのです。

しかし、人生は決して自分が願い、思い求めるようには生きられません。その善悪に関係なく思いもよらない様々な出来事に遭遇します、それでも生きつづけなければなりません。つまり、人生を生きるということは、自分（人間）が計らう事ができる世界と、自分（人間）の計らいを超えた世界に自分の身を置くことだ、ということに気付くのです。ここに人生の不思議さがあります。

このことを私たちの言葉で言いますと、人生というこの現実の世界には「見える世界」と「見えない世界」があると言うことです。それは、科学が発達すれば見えて来るような「見えない世界」という事ではありません。科学が発達すれば見えてくる世界は「やがて見えるであろうという見える世界」です。そうではなく、人間であるということの限界点を超えた世界、と言えば、すでに人間が考えた限界点を超えたという意味で、やはりそれも「見える世界」内の範疇に属するわけですから、本当に「見えない世界」とは、絶対の無という表現も超えたまことに不思議な世界ということです。その世界をわたしは「スッカラカンのスッカラカン」と申しております。また、深淵に石を落とした場合、何十年・何百年・何千年・何万年・何億年を経ても底についた音が聞こえてこない不気味で畏るべ不可思議の世界とも申しております。

にも拘らず、すべては「見える」と思い込んで生きているのが、現代の人間の悲劇の始まりなのです。本当に畏敬すべき何ものをも持っていない人間は、本当の安心と平安とを絶対に得る事は出来ません。いつも餓鬼世界に生きるだけです。つまり、永遠に満足は得られず、何時も、何時までも精神（霊魂）的にも肉体的にも餓鬼状態で、最後は地上から消え去る。このような生き方は、聖書の創世記にあるエデン（幸福の園）からアダムガ追

放される神話を思い出す。神はアダムに言われた。

お前は一生、苦しんで地から食物を取る。お前は顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る。お前は土から取られたのだから、お前は塵だからちりに帰る。

―創世記三章一七節以下―

また、イエスが教条主義的律法主義（聖書文字主義）信仰に生きるパリサイ人に厳しく言われた言葉を思い出します。「お前たちが、自分たちは見えるというところに罪はそのまま留まっているのだ」（ヨハネ福音書九章四一節）

さらに使徒パウロは言った。「私たちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去ります。見えないものは永遠に存在するからです。」（コリントⅡ．四章一八節）　パウロにとって見えるものは何時も見て、自ら日々の現場で体験していることです。それは決して絶対的なものでは無いこと、つまり相対的なものであることを、少しでも人生を経験した者には体験的に了解きることです。だからこそ、パウロは見えないものに目を注ぐのです。それは、目に見ない世界に開眼するということは、目に見える世界の一つ一つの意義が、つまり自分がこの世で人間として生きることの秘儀が本当に見えてくるということなのです。ここに「イエスとは何か・誰か」と問う理由があるのです。そして、その人間存在の秘儀ともいうべきことがらを、原始教団の人達はイエスに於いて開眼させられ、彼らはその当時の生活の座、即ち社会的、文化的、伝統的、歴史的自然的風土に生きる現場から、イエスも含めて、彼らなりのキリスト論を証示したのです。ですから、そこで証示された「命」を現代という現場で私たちは頂くことこそ大切なのであって、そこに記されある文字をただ情報言語として、その文字をそのままそっくり

信じて受け入れることが正しい信仰なのだとすることは、ただ、相対的な「見えるもの」にしがみついて、「安心・安心」と自己満足していることにすぎないと言えましょう。

わたしたちは、イエスが証示した大いなる命のたぎりの見えない世界を、生々しくイエスから、その現場で、霊的に受け取り、且つ開眼した人達の信仰告白の根柢にある宗教的な実存、つまり聖書が証示している、その大いなる命を深く鋭く霊的に洞察し、二十一世紀に生きる日本人として、その現場で、自らの宗教的実存の根拠、根柢をいただきたいと願っています。その意味で「イエスとは何か」「イエスとは誰か」を問うのです。

本論に入りたいと思いますが、ひとまず序論的文章の大切な部分のまとめをしておきましょう。

○最も大切なことは、聖書は情報言語・伝達の言葉ではなく、神の大いなる命、即ち超越的な神の創造的な命のたぎりの世界の証示の言葉・表現の言葉であるということ。

○次に、聖書は、特に福音書は歴史のイエスの実像を順序立て記した伝記的な文章ではなく、イエスとは誰か、イエスとは何か、ということを折衝的に記した原始キリスト教団の座から記された「キリスト論」であると言うこと。

○古代のキリスト教会が問題にしことは「イエスが神の独り子であるという神性と歴史的な存在としての人性との矛盾をどのように受けとめればよいのか、即ち理解すればよいのか、という問題であったということ。

○最後に「イエスに於いて起こった歴史的な一回性の出来事を唯一神の啓示であり、その

出来事に於いてのみ人は神を知り得、その神の出来事を信ずることによってのみ人間は救われるということは、キリスト唯一絶対主義であり、排他的な独善ではないか。それは自己中心的でありアガペーを説くキリスト教と矛盾するばかりではなく、宗教戦争や異端迫害に通じ、現代社会では誰も受け入れはしないだろう。

それら、排他的不寛容性は選民意識から結局、脱却できていないのではないか。」という西谷啓治氏の指摘に真摯に注目したい。

以上のような視点、論点から「イエスを問う」ということの意義は、伝統的、正統的と言われる西欧キリスト教の教義（ドグマ）に基づく現代の「キリスト教会」を、ただ否定するためではなく、本来イエスが証示する命の世界に開眼させられることによって、その宗教的実存が万人が受け入れられる人間存在の普遍的な命の芯（根っこ）に関わるという意味で、教会は、自己のドクマの呪縛から開放され、キリスト教会が本来もっているが、未だ見いだしていない真理の世界を、イエスの視点に立って神と人間との関係を素朴に問いなおしてみようと思うのです。

さらに、このような問いは、宗教全般、したがって人間の在り方、それは、政治や経済ひいては、科学や芸術その他すべての分野における、現代の在り方への反省を促す視点が得られる一つになるのではと考えております。

この序論を終わるにあたって、三十五年程前に記した冊子「途上」の前書きの一節を思い出しました。以下で、記させていただき、この度の序論を終わります。

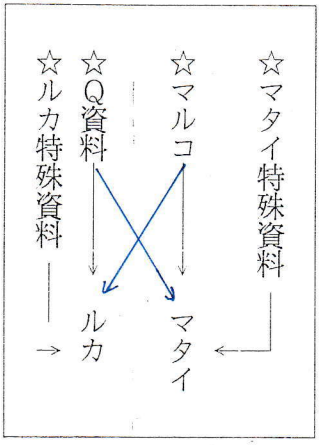
「……わたしたちは日々刻々生きつづけて、変化しつづけるのであって固定化は精神の死を意味します。人間の考えが、ある特定の時と場で固定するとき、人間は人間として、も

はや生きてはいないで死者となったのではないかと思います。特に、宗教的生における固定化は、その宗教、ないしは、信仰の命の喪失を来たらせます。常に自己の生の在り方を固定化から開放し、自己自身を否定しつづけるところに宗教は命を保ち、信仰者は真に信仰者として生きつづけることができるのです。同時に、そのような生へ人間を押し出して行かせるものが真の宗教であり、信仰だと思います。…」

尚、この続きの「本論」は本年九月に開催予定の「あごらの集い」においてご一緒に学び、みなさま方と分かち合いたいと願っています。

参考にした書物

キリスト論論争史　水垣　渉・小高毅　編
イエス研究史　大貫　隆・佐藤研　編
仏教とキリスト教　滝沢克己著
西田哲学の根本問題　滝沢克己著
原典古代キリスト教思想史　小高　毅
日本神学史　古屋安雄　他著
場所論的論理と宗教的世界観　西田幾太郎全集十一巻
イエス　八木誠一著
イエス　R．ブルトマン（日本語訳）
ナザレのイエス　G．ボルンカム（日本語訳）
ただの人・イエスの思想　柴田　秀
四福音書対観表　ギリシャ語・日本語版
創成神話の研究　月本明男篇
新約聖書福音書　新約聖書翻訳委員会版
第2バチカン公会議公文書全集　南山大学監修
新約思想の構造　八木誠一著
エックルハルト　上田閑照著
キリスト教神秘主義著作集第六巻「エックルハルト」

現代のキリスト教　小田垣雅也
思想の広場　滝沢克己協会
イスラムを学ぼう　塩尻和子著
聖書の世界　新約五　田川・八木・荒井訳・著
古代秘境の本　メソポタニヤの秘儀・エジプトの秘儀　学研
岩波キリスト教辞典　大寰隆　他篇
キリスト教神学事典　A．リチャードソン・J．ボウデン篇
現代キリスト教神学思想事典　A．Eマクグラス篇
途上　松下昌義著

※共観福音書三資料説図